

## 聖母被昇天をお祝いいたします。

アウシュビッツ強制収容所で、幼いこどもがいるお父さんの身代わりとなり、ガス室で最期を遂げたマキシミアノ・マリア・コルベ神父。亡くなるまで、神の恵みを説き、大好きな聖母マリアを通して祈っていました。その願いが聞き入れられたのか、8月14日、「聖母の被昇天のお祝い」の前日に天に召されました。

今年、アウシュビッツ解放70年を迎えます。どうか世界から戦争がなくなりますように！



## 日本カトリック映画賞『谷川さん、詩をひとつ作ってください。』授賞式&上映会 シグニス平和賞『石川文洋を旅する』授賞式 2015年5月5日（火）なかのZERO小ホールにて行われました。

2015年5月5日、なかのZERO小ホールにて、シグニス ジャパン主催『第39回カトリック映画賞授賞式・上映会』が行われた。館内550席はほぼ満席状態であった。

今年の映画賞には、杉本信昭監督の『谷川さん、詩をひとつ作ってください。』が選ばれた。また、今回新しく創設されたシグニス平和賞に、大宮浩一監督の『石川文洋を旅する』が選ばれた。

シグニス顧問司祭晴佐久昌英神父は、「今の平和な日本で戦争と言ってもピンとこない。従軍カメラマンとしてベトナムに行った石川さんが、ベトナムで何を感じ、何を記録し、今どう思っているのか。身近な日本人の人生の旅を撮ることで、私たちも戦争という究極の悪にしっかりと触れ、知ることができる」と語られた。また、大宮監督は「今の石川さんと共に、50年前の石川さんを旅する、という気持ちでこの映画を作った」と語って下さった。



左より 晴佐久神父、杉本監督、小松原氏

続いて、『谷川さん、詩をひとつ作ってください。』の授賞式が行われた。晴佐久神父は、「愛である言葉を使った『詩の映画』など作れるはずがない、と思っていたが、このような方法があったのかと驚かされた。普通の人々が普通に発する言葉を使って、そこに谷川さんの言葉が響き合うという絶妙なバランスの世界ができあがった。言葉の大本にある「愛」を感じて頂き、ゆっくりと自分の言葉を確かめてほしい」と語られた。杉本監督は、「『詩』に対してほとんど興味のないまま撮り始めた。その中で、およそ結びつくことができない言葉を、「詩」という形式の中で結びつける谷川さん。お互いを知らずに日常生活を営んでいる人たちが、映画の中では結びつくということを考え、そのことだけを信じて作り上げた映画」と語られた。

授賞式が終わり、いよいよ作品が上映される。観ている人は、知らず知らずのうちに映画に引き込まれ、次第にスクリーンと一体となった感じを受ける。「詩」を作るところを映画にするのではなく、映画に出て来るそれぞれの人の生活に、谷川さんの詩が当てはめられていく。観ている人の中の気持ちの中にも、同じように「谷川さんの詩」が響いてきたのではないだろうか。



杉本信昭監督、大宮浩一監督を囲んで

上映後、杉本監督、小松原時夫プロデューサーそして、晴佐久神父の鼎談が行われた。鼎談での中心は、やはり「言葉」であった。監督は、「『詩』のような映画、すべての人の言葉が『詩』のように見える映画にしたかった。谷川さんは「だれの中にも『詩情』がある」と言われる。そのように思わせたい作品にしたかった」と語られた。また、晴佐久神父の、カトリック映画賞を授賞されたことへの質問に対して、監督は、賞を頂いたことに驚きを感じたと語られ、「言葉になる前の沈黙が大事だと思う。話せない人、言葉を持っているのに発せられない人、言葉を溜めている人が言葉を音として発せられる。詩人ではないが、いつか話す時が来るために、沈黙をして溜めているところが、宗教にも通じるのでは」と語られた。

映画を通して、また、授賞式、鼎談を通して「言葉」の素晴らしさ、大切さを、なかのZERO小ホールに集った人が一体になって分かち合った。（映画チーム）

## 賛助会員と共に捧げる感謝ミサ

台風が去った7月20日（月）（海の日）、四谷の聖パウロ会若葉修道院の聖堂をお借りして、共に感謝を捧げるミサが行われた。この夏一番の猛暑日となったにもかかわらず、20数名の方々が参加された。ミサは「荒れ野のオアシス教会を目指して」のテーマのもと、顧問司祭晴佐久昌英神父の司式で行われた。ミサの説教で晴佐久師は、7月のスイス巡礼の日々、心に残る感動のミサ体験について、また今ここに集まった方々と共に捧げる福音宣教を目指すミサの素晴らしさ、そしてこの夏、大勢の若者と共に奄美の合宿所にできた新しい聖堂で捧げられるミサについて話され、いつでもどこでも誰にでも、喜び希望や感動を与えるミサに参加者の心は幸せで一つになった。



ミサ後、地下のホールに移り冷たい飲み物で乾杯、Br.井手口の司会で、千葉会長、晴佐久師、土屋副会長のあいさつに続いて、今年の日カトリック映画賞に選ばれた、「谷川さん、詩をひとつ作ってください。」の上映会時に会場で発表した、晴佐久神父による谷川俊太郎さんのインタビューDVDを鑑賞した後、自己紹介を兼ねて、最近見た映画について、参加者一人ひとりが感想などを述べ合った。

最後に、終わりの祈りに代えて、現代に生きる難しさをもっと原点に戻り、シンプルに考えていきたいと思います、Sr. 古木の「いのち」を全員で詩をかみしめながら歌いました。神に感謝。（山本記）

## 戦後 70 年に想う！ シグニス ～小さなことに愛をこめて～

千葉 茂樹

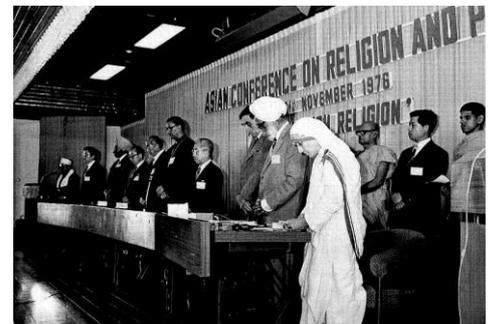
シグニス平和賞がドキュメンタリー映画「石川文洋を旅する」に贈られた。青年は、いかにして戦場カメラマン“石川文洋”になったか。1938年沖縄に生まれた石川文洋さんは世界一周無銭旅行を夢見て日本を脱出。64年から南ベトナム政府軍・米軍に従軍し、戦場カメラマンとしてベトナム戦争を世界に伝えた。そして68年末に帰国後今日まで、ふるさと沖縄の姿を記録し続けている。本作は、75歳になった文洋さんと共にベトナムと沖縄を旅し、生い立ちと青春とを見つめる。切り売りした命がけのネガフィルム、サイゴンに下宿、アオザイを着たスチュワーデスの神秘的な魅力、解放戦線兵士が眠る烈士墓地、幾世代にも及ぶ枯葉剤の影響。



2014年は文洋さんが従軍取材をはじめて50年の節目の年になる。その奇跡をたどるこの旅は、今という時代を生きる私たちを深く静かな思索へといざなっていく。（オフィシャルサイト：<http://tabibunyo.com>）

私たちはメディアの制作者ではありません。むしろ伝達者なのか、宗教者の仲間であると考えています。そこで皆さんは、“宗教者による平和”が戦後70年どのように進められてきたか考えた事がありますか？私たち夫婦が体験したささやかなエピソードをご紹介します。

京都で開催された第1回の世界宗教者平和会議が行われた1970年当時にさかのぼります。秋の気配がようやく深まる日本の古都・国立国際会館ではかつてない光景が展開されていた。10月16日から6日間・世界39カ国300人の宗教者が一堂に会し「宗教による平和」の会議が持たれた。4年後、ヨーロッパの中央であるベルギーの大学都市ルーベン市で開催された第2回世界宗教者平和会議の開催。その2年後、「宗教による平和」の動きは世界規模になった。1976年11月に私たちは、アジアで初めての第1回アジア宗教者平和会議でもボランティアスタッフとして、シンガポールに滞在していた。それ以前の3週間を掛けて、私たちはインドのコルカタにマザー・テレサを訪ねた。



第1回アジア宗教者平和会議  
シンガポール(1976年11月)

インドはまさに宗教のるつぼである。そしてアジアの中心シンガポールもまたアジアを象徴する虹に似ている。アジア諸国から800人を超す人びとが色とりどりの民族衣装でシンガポール大会堂に集まった。会場正面には大きな横看板で大テーマ『宗教による平和』が掲げられている。ところが、開会と同時にコメントが流れた。初日に予定されていたマザー・テレサの到着が遅れていると言うのだ。当時シンガポール沖合ではインドシナ戦争の難民がボート・ピープルとして行き先を探していた。マザーはその救援に駆け回っていたのだ。最終的には、6日間の最後に到着した彼女は閉会式のスピーチで大役を果たした。私は今でもその時の感動を思いだす。

“私たちキリスト者のシスターたちは、毎日二つの聖体拝領に預かります。一つは早朝ミサのなかで頂くパンのかたちをしたご聖体、そして二つ目は路上で出会う貧しい人びとです。この存在こそ、わたしたちにとってご聖体と呼べるもの、わたしたちはこの貧しいなか生きるキリストご自身に仕えています”

総合司会を勤めていたマレーシア大学の副学長は、このマザー・テレサの言葉に6日間にわたる会議の閉会に代える程の感動を味わったと語った。

振り返って、私たちはインドのコルカタにマザー・テレサの修道会「神の愛の宣教者会」を訪ねた日の感動が重なった。日本ではまだ知られていないときである。修道院の聖堂には、十字架と並んで「I THIRST」(我渴く)という木に刻まれた文字が掲げられていた。まさにマザー・テレサが十字架上のキリストの渴き(ノドの渴きではなく、愛の渴き)に応えたいと願っているのである。その十字架とともに掲げられた召命こそがマザー・テレサの信仰と実践のシンボルなのである。それこそが宗教者の平和へのメッセージに他ならない。

「平和こそは小さな微笑みから始まります。小さなことを大きな愛をもって」(マザー・テレサ)

## シグニスジャパン総会 新体制決まる

去る5月19日、関口会館2Fの東京教区事務所にて、シグニス ジャパンの2014-2015年度総会が開かれた。晴佐久神父のお祈りの後、まずは2014年度活動報告、決算報告が承認された。次いで副会長を若干名とする規約改正も可決され、役員改選では千葉会長の1年続投、副会長は土屋氏が再選、また新たにBr.井手口が加わった。町田事務局長と会計のSr.清水は留任。また総務国際チームは事務局と名前を変更し、事務局長を支える体制ができた。中期活動方針は別途じっくり一日合宿にて話合うことにし、2015年度活動計画と予算案は説明・質疑の後、承認された。2015年度は既に第39回映画賞・第1回平和賞も終わり、今後の予定は8月下旬アジア会議、11月東アジア会議、来年2月にインターネットセミナー開催予定。また、2016年5月5日の日本カトリック映画賞が第40回目を迎えることもあり、場所は「なかのZERO大ホール」とし、記念すべき回となるので十分な企画と準備を確認した。最後にSNNよりの活動報告・活動計画、決算・予算報告があり、Br.井手口のお祈りで閉会した。

ご出席予定だった幸田司教様が急用のため急遽会議を欠席されたことは残念であったが、総会後は皆でカテドラル近くのレストランで大いに鋭気を養った。これから3年、より組織だった対応ができる様に努めますので、皆さま方には是非よろしくお願い申し上げます。(事務局)

## 会員紹介 ~縁あってこそ~

鵜飼 恵里香 (三軒茶屋教会)

私がSIGNIS JAPANを初めて知ったのは、1996年第21回カトリック映画賞の「絵の中のぼくの村」上映会でした。会長の千葉茂樹氏から上映会があるから来ないかとお誘いを受け、伺ったのです。その後、インターネットのことを知っている人にぜひ参加してほしいと千葉氏から誘われ、女子パウロ会の会議室(?)に呼ばれて現在に至っています。当時の私は決してインターネットにくわしいわけではありませんでした。仕事で、NHKの大河ドラマ『元祿繚乱』のWEB上の編集や原稿書きを担当していたり、日経の女性サイトの編集をしていたりする程度だったのです。

そんな状況で、何が何だかわからず、何気なく毎月行くようになり、いつのまにか10年以上の歳月が経っています。その間、千葉茂樹監督の『映画で地球を愛したい-マザー・テレサへの誓い』を弊社で刊行するという幸運に恵まれました。

いつも思うことですが、生きていく上で最も大切なことは人との出会いだと思っています。決して熱心な信者ではありませんが、神の愛に導かれ、人との縁に結ばれて、今ある関係を大切にしていきたいと思っています。

## 賛助会員募集

と一緒にメディアを通して福音を伝えていきましょう！

私たちSIGNIS JAPANの活動をサポートして下さる賛助会員を募集しています。会員の方には、ニュースレター「タリタ・クム！」(年3回発行)をメールまたは郵便にてお届けする他、賛助会員と共に捧げる感謝のミサを東京地区で行っています。詳細は賛助会員の皆さまにご連絡させていただきます。年会費一口 3,000円。ご入会いただける方は、氏名、住所、連絡先を下記までお知らせ下さい。どうぞよろしくお願いいたします！

〒107-0052 東京都港区赤坂8-12-42 聖パウロ女子修道会内 SIGNIS JAPAN / [info@signis-japan.org](mailto:info@signis-japan.org)

会費およびご寄付は、下記へ振込みをお願いいたします。

銀行振込 三菱東京UFJ銀行 六本木支店 普通 1679019 SIGNIS JAPAN 代表 千葉茂樹

郵便振替 口座番号 00100-0-594547 口座名称 SIGNIS JAPAN 代表者 千葉茂樹